

飛鳥資料館のみどころ (9)

展示品解説 その1

「石人像」

亀石など石造物のレプリカが展示してある庭を通りぬけ、飛鳥資料館の建物に入ると、まず出迎えてくれるのが、玄関ホールに展示してある石人像(重要文化財)です。

明治36年(1903)に、飛鳥寺(安居院)の北西の水田(現在の石神遺跡)から出土した、高さ約1.7mの石造物です。

等身大の老人男性が衣服を着て岩に腰掛け、その横に老人女性が男性の袖にそっと手を添えています。女性はスカートをはき、筒袖の上衣を着ています。特に、足のくるぶしなどの細部が細やかに表現されています。現在は欠損している男性のもつ盃と女性の口には、像の底からつながる直径約2 cmの孔が開けられています。おそらくは噴水として用いられたのだろうと考えられています。

石人像が出土した石神遺跡は、その後の発掘調査によって、飛鳥時代の迎賓館と想定されています。噴水である石人像は、その迎賓館において遠来の客を迎えた、饗宴の場でのデコレーションだ

ったのでしょうか。その様子は、当資料館の庭に展示してある復原された石人像でみていただけるかと思えます。

電動工具の無い飛鳥時代に、硬い花崗岩にどのようにして直径約2 cmの孔を貫通させたのか、古代人の技術力の高さを肌で感じることができる逸品です。(飛鳥資料館 西山 和宏)



石人像